【原　　著】

男性保育者に関する研究動向と今後の展望

栗原　匡虎　蓮井　和也　片山　美香

Studies on Male Child Caregivers, Past Trends and Future Perspectives - Literature Review

KURIHARA Kyogo, HASUI Kazuya, KATAYAMA Mika

2024
岡山大学教師教育開発センター紀要　第14号　別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.14, March 2024

岡山大学教師教育開発センター紀要，第 14 号（2024），pp.373 － 387

【研究ノート】

原　著

男性保育者に関する研究動向と今後の展望

栗原　匡虎※1　　蓮井　和也※2　　片山　美香※3

本研究は、男性保育者を対象とした先行研究から、研究動向を明らかにし今後の課題を展望することを目的とした。対象文献は、CiNii Research を用いて、「男性保育者」をキーワードとして設定し検索したところ、84 件が分析対象となった。対象文献を内容ごとに整理した結果、８つに分類することができた。各分類から、男性保育者に対する保育現場及び社会の認識は比較的明らかにされていたが、男性保育者自身の視点に焦点を当てた研究は十分でないことが明らかとなった。今後は、誕生して 50 年以上が経過した男性保育者を取り巻く周囲の認識の現状を改めて検討するとともに、男性保育者が保育職にやりがいを感じ、長期的なキャリアを築くにあたっての自己認識及び男性保育者が抱える課題の明確化が必要と考えられた。

キーワード：男性保育者，研究動向，文献研究，展望

※1　岡山大学大学院教育学研究科大学院生
※2　川崎医療福祉大学
※3　岡山大学学術研究院教育学域

Ⅰ　「男性保育者」に関する研究の問題と目的

1999 年に「保母」から「保育士」への名称変更が行われた。20 年以上経過した令和２年の国勢調査の結果によると、就業者数 634,080 人であり、そのうち男性は 19,930 人と約３％（総務省，2023）であった。男性保育士は稀有な存在であるといえる。

本研究において「男性保育者」は、幼稚園、保育所、認定こども園のいずれかの乳幼児教育・保育施設に勤務する男性の幼稚園教諭、保育士、保育教諭と定義し、「男性保育者」と記述を統一する。なお、本研究において取り上げる先行研究で男性保育者を意味する名称については、原文に沿って記載する。

本研究の目的は、男性保育者を対象とした先行研究の研究動向を概観し、今後の課題を展望することにある。

Ⅱ　方法

先行研究の抽出に当たっては、男性保育者にとって一つの転機となった「保母」から「保育士」へと資格の名称変更がなされた1999年を始期として、2023年９月時点までに公刊された論文の中で「男性保育者」をキーワードとして持つ研究論文を対象とした。抽出するにあたって、国立情報学研究所の電子ジャーナルデータベース“CiNii Research”（以下、CiNii）により「男性保育者」をキーワードとして検索した。

Ⅲ　結果及び考察

１　検索結果

「男性保育者」をキーワードとした検索の結果、108編（2023年９月18日時点）が抽出された。108編の内、重複文献が、17編、及び直接原文を手に入れることができなかった７編を分析対象外とし、84 編を分析対象とした。なお、「男性保育士」をキーワードとした検索の結果と重複した論文は１編、「男性幼稚園教諭」をキーワードとした検索の結果と重複した論文は０編、「男性保育教諭」をキーワードとした検索の結果と重複した論文は０編であった。

２　抽出した研究の内容による分類

まず、分析対象となった研究論文について、KJ法的手法を用いて目的による分類を行った。その後、内容を精読し、再分類を行った。高嶋・安村（2007）の分類を参考に、「男性保育者に期待される資質・役割」「男性保育者の位置づけ」「ジェンダーステレオタイプと保育現場の実態」「保育現場で抱える不安や悩みの意識共有による課題解決の模索」「海外における男性保育者の位置づけ」「男性保育者の職業観・ライフコース」「男性保育者育成のための養成校の関わり」「その他」の８つに分類された。

表１　「男性保育者」に関する研究の論文数の推移

	男性保育者に期待される資質・役割	男性保育者の位置づけ	ジェンダーステレオタイプと保育現場の実態	保育現場で抱える不安や悩みの意識共有による課題解決の模索	海外における男性保育者の位置づけ	男性保育者の職業観・ライフコース	男性保育者育成のための養成校の関わり	その他	論文数
カテゴリー別論文数	26	6	9	3	4	11	13	12	84

（１）男性保育者に期待される資質・役割

「男性保育者に期待される資質・役割」に該当する論文は、26編であった（表２）。保育現場で働く女性保育者や保護者への意識調査を実施し、保育現場における男性保育者の存在意義や役割を明らかにする研究が多く見られた。８つの分類の中で最も文献数が多かったことから、男性保育者に期待される資質・役割について多角的に調査が行われてきたことが伺える。

竹沢（1999）は、公立保育所及び私立（法人立）認可保育園の施設長及び副施設長、保育者、事務職を対象に男性保育者の役割分担の必要性の有無を問う

質問紙調査を実施した。その結果、「力仕事」や「ダイナミックな遊び」、「父親・兄的存在」といった資質・役割が男性保育者を必要とする理由として多く挙げられており、これらの資質・役割が男性保育者の特性と認識されていることを明らかにした。同様の結果は小崎（2001）や松本ら（2015）の研究等にも認められ、保育現場で概ね男性保育者に期待されている資質・役割であることが分かる。また、出雲・佐藤（2010）は、保護者に「男性、女性それぞれの保育者についての役割」を自由に記述してもらった結果、「男女の保育者に同じ役割を求める」と回答した人は15.5%であり、84.5%は「男女の保育者でそれぞれに違う役割を求める」との回答を得た。また、「体操のお兄さん的役割」として期待されているが、性別役割を肯定する保護者と否定する保護者が共に「男性保育者の担任を希望しない」割合が半数以上であった結果から、男性保育者の役割に対する保護者の期待が限定されているという現状を認識する必要性を指摘している。保護者をはじめとする社会的ニーズとしては、男女の保育者に一保育者としての役割よりも男女それぞれの性別による特性を活かした保育を期待していると推察される。

井上・石川（2008）は、現役保育者を対象とした質問紙調査によると、男性保育者に身につけてほしい技能や資格として、基本的な保育スキルの他に「体育指導の資格・運動や外遊びの技能」、「電気・木工・修理・修繕の技能」を挙げていた。男性保育者は、女性保育者が苦手と捉えた技能面での補助・支援者として求められていることを示唆している。また、母親に対する理解や気配り、女性保育士への理解と協働に関わる「女性理解」の資質が求められており、女性・母親中心の保育現場で働くために必要不可欠な資質として指摘されている。

表 2　「男性保育者に期待される資質・役割」に分類される先行研究一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
1999	わが園の男性保育者は京都での第一号	藤田ヒサエ	子どもの文化 31 (7), 10-12
1999	男性保育者の役割に悩んだこともあった	龍田浩一郎	子どもの文化 31 (7), 13-15
1999	男性保育者へのまなざし-保育現場における男性保育者に関する意識調査より-	竹沢昌子	沖縄キリスト教短期大学紀要(28),299-310
2000	男性保育者に関する調査研究(3)保護者を対象とした意識調査から	鈴木弘充・齋藤政子・木下比呂美	湘北紀要 (21),35-45
2001	男性保育者導入のジェンダー効果-EUでの取り組みをとおして-	埋橋玲子	家族関係学 一般社団法人日本家政学会家族関係学部会誌/家族関係学部会編集委員会 編 (20), 107-118
2001	自主ラウンドテーブル9　男性保育者は本当に必要か!?-保育者と"男性"保育者の間で揺れる"男性保育者"たち-	那須信樹・小崎恭弘・木下比呂美・近藤浩司・高濱正文・中田奈月・西岡孝洋・相浦千恵子・河野ゆかり	日本保育学会大会研究論文集 S52-S53
2001	男性保育者に対する意識-女性保育者・保護者の意識から-	菊地恵子・菊地政隆	日本保育学会大会研究論文集 814-815
2001	保育者は男性保育者の存在意義をどのように捉えているか-女性保育者・男性保育者に対する男性保育者に関する意識調査の検討-	斎藤政子	日本保育学会大会研究論文集 66-67
2001	男性保育者の社会的役割-その変遷と新たなる役割-	小崎恭弘	日本保育学会大会研究論文集 68-69
2002	「男性保育者」の創出-男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響-	中田奈月	保育学研究 / 日本保育学会編集常任委員会 編 40 (2), 196-204
2002	男性保育者に対する態度-女性保育者・保護者・学生からみて-	菊地政隆	保育学研究 / 日本保育学会編集常任委員会 編 40 (2), 205-211
2002	男性保育者についての意義と役割-子ども・女性保育者にとって男性保育者はどういう存在か-	齋藤政子	家庭科教育 76 (1), 42-47
2002	保育園に子どもを預ける親への男性保育者に関する意識調査の検討	斎藤政子	日本保育学会大会発表論文集 370-371
2002	男性保育者の専門性について	小崎恭弘	日本保育学会大会発表論文集 562-563
2003	「男性保育者」言説の変遷-全国紙を事例として-	中田奈月	家族関係学 一般社団法人日本家政学会家族関係学部会誌/家族関係学部会編集委員会 編 (22) ,85-94
2003	保育園保護者は男性保育者についてどう捉えているか	斎藤政子	日本保育学会大会発表論文集 858-859
2003	身体活動における男性保育者のかかわり方	川口愛子, 笠井里津子	日本保育学会大会発表論文集 284-285
2007	男性保育者の独自性に関する探索的研究-幼児のインタビュー調査による両性保育者のイメージ比較-	大和晴行・嶋崎博嗣	運動・健康教育研究/日本幼少児健康教育学会紀要編集委員会 編 15(1),12-19
2008	男性保育者に求められる役割と課題	井上清子・石川洋子	生活科学研究 207-214
2008	『保育現場における男性保育者に対する意識調査』-男性・女性保育者から見た男性保育者-	斎藤正典・平田健郎	盛岡大学紀要 67-77
2010	性差に関する意識調査による女性・男性保育者の役割考察	出雲美枝子・佐藤 利一	大阪芸術大学短期大学部紀要 75-90
2010	男性保育者の役割と働き甲斐について-K市の公立園に勤務する男性保育者への個別面接調査から-	安井恵子・古橋紗人子・早川滋人	滋賀短期大学研究紀要 (35) 31-40
2015	男性保育者に対する保護者の意識に関する研究	松本希・宮宅賢人・澤津まり子	就実論叢 第44号 303-309
2016	子育て支援における男性保育者の役割に関する一考察	柏まり・佐藤和順	就実論叢 第45号 275-286
2016	男性保育者がもつ役割意識-保育経験による差異と女性保育者の認識との差異に着目して-	中島卓裕・永田雅子	名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学63 129-134
2022	人は男性保育者をいかにイメージするか:学生と乳幼児を持つ親を比較して	横井志保	名古屋学院大学教職センター年報 43-51

（２）男性保育者の位置づけ

「男性保育者の位置づけ」に該当する論文は、６編であった（表３）。保育現場における男性保育者の必要性について、父親支援や身体的活動の側面から検討することを目的とした研究が見られた。

古橋ら（2008）は、「少子化が進む現在の日本において、家庭では父親に子育てへの参加が求められ、その父性が問われている。そして、父親は家庭に限定せずに、保育の現場への参加の期待も高い。また、共働きや核家族化、一人親家庭の増加に伴い、保育場面での父親的役割や父性の特性をふまえた保育や子育てが問われ、男性保育者への期待は大きい」と述べており、園児の父親が保育に参加することが求められているとともに、保育現場において、保育の一翼を担う男性である保育者への期待が大きいことを示している。しかし、同時に、男性保育者の保育場面での位置づけや役割を明確化するには至っていないことを指摘している。その後、田辺（2017）は、男性保育者を対象としたインタビュー調査から『父親とのかかわりにおける男性保育者の立ち位置』として、【父親と園をつなぐ窓口】としての必要性を見出した。父親にとって男性保育者は、同性であり近い存在であると捉えられ、保育現場に足を運びやすくなるという。男性保育者は父親が園と繋がるきっかけの一つとなる人的環境としての役割を担っていることを示した。また、【父親と園をつなぐ窓口】としての必要性について古谷（2020）は、ドイツ、ノルウェー、トルコ、ベルギーの文献を中心とした文献調査から、男性保育者は父親にとって同じ男同士で気軽に関わり、頼ることのできる存在という重要な役割を果たし、父親の保育現場内でのコミュニケーションが促進されることを明らかにした。男性保育者は国内だけでなく、諸外国においても父親の育児参加および父親支援に関わる人的環境として必要とされていることが分かる。

他方、戸田ら(2017)は、保育所と幼稚園の理想的な保育者の男女比は「男性５割＋女性５割」と均等ではなく、多くの現役保育者が「男性２割＋女性８割」や「男性３割＋女性７割」と男性の割合を低く意識していることを示し、保育現場における男性保育者の量的必要性を低く評価していることを指摘している。また、現場で求められる男性保育者の人数は、女性保育者に比べて相当少ないことも明らかにしている。このような期待される保育者の男女比の根拠は明確にされてはいないため、今後の研究課題として挙げている。

表 3　「男性保育者の位置づけ」に分類される論文一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
2007	男性保育者を多く雇用するわけ	野上昭代・季刊	保育問題研究 /全国保育問題研究協議会編集委員会 編 (226) 70-76
2008	男性保育者の有効性について-父親のマンパワー・男性保育者の意識調査から-	古橋紗人子・早川滋人・安井恵子	滋賀女子短期大学研究紀要 (33) 59-71
2017	家庭と連携した保育を展開するための一方策-保育現場における父親支援に焦点をあてて-	田辺昌吾	(四天王寺大学)エデュケア37 19-26
2017	男性保育者の必要性と理想的な保育者の男女比に関する意識調査-保育者志望学生と女性保育者を中心として-	戸田大樹・ 松本佳代子・氏家博子・荒木由紀子・飯塚汐里・高橋健司	創価大学教育論集 第69号 3-17
2020	父親の子育て参加と男性保育者の影響/役割：欧州、北米、オセアニア8カ国の研究から	古谷淳	教育学研究 明星大学通信制大学院研究紀要 73-86
2021	男性保育者は幼児をより活動的にするのか？	山中拓真・本多舞	保育学研究, 59 (1), 45-56

（３）ジェンダーステレオタイプと保育現場の実態

「ジェンダーステレオタイプと保育現場の実態」に該当する論文は、９編で

あった（表４）。現代の保育現場におけるジェンダーの実態と課題の考察、及び男性保育者に向けられるジェンダー的視点からの課題が考察されていた。また、保育現場における男女平等の実現のための視座を得ようとする松田(2020)のような研究も見られた。

保育現場におけるジェンダーの実態として、赤澤（2004）は、男性保育者には「育児性」としての「母性」の高さを望んでいる一方、「男らしさ」への強い期待もあることを指摘している。また、ダイナミックな遊びの展開への期待とともに、「“男性なのに”元気がない」、「“女性のように”細かい気遣いができるのか」といった指摘に、「女性が保育に向いている」という母性神話の反映にほかならないと主張している。未だに保育現場には「保育＝女性の仕事」といったジェンダーステレオタイプが潜在していることを示している。これらには共通して、保育現場に一定のジェンダーステレオタイプが残存していることを示唆する結果であると言えよう。今後、保育現場における性別役割意識に関するさらなる検討が必要であると考える。

渡邊（2021）は、男性保育者と直接関わったり、男性保育者も子どもに愛情をもった行動が可能であると確信がもてるようになったりすれば、男性保育者への印象がポジティブになり、男性保育者が女児の着替えに携わることに賛同が得られやすくなるのではないかと述べている。他方、着替えの補助についても身体接触が伴うため、保育者が性別役割分担をすべきであり、犯罪の可能性があるといったセクシュアリティの考えが根強く残存している現状も明らかにしている。男性保育者との接触機会を設けることによって、性別に囚われない保育者としての存在への賛同を以て、男性保育者を肯定する可能性を見出したものの、女児とのかかわりがジェンダー課題を招来し、男性保育者の保育職への障壁となっている現状が見て取れた。男性保育者に対する社会的な認識を肯定化するには、保育現場におけるジェンダー課題の解決が必要不可欠である。

保育現場におけるジェンダー課題の解決について、松田（2020）は、21 世紀初頭から保育者のジェンダーバランスに関する政策を進めてきたノルウェーと我が国の状況を比較し、「日本においても男女平等の重要性についての認識は高まってきているが、依然として性別による不平等は根強く残る。男女平等社会を築くためには男女平等に関する法律の整備に限らず、人々の意識に潜む無意識のバイアスを取り除くことが必要である。」と述べ、社会的な性別に対する偏った認識の変革の必要性を指摘している。

表 4　「ジェンダーステレオタイプと保育現場の実態」に分類される論文一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
1999	は･た･ら･く(4)保育の仕事に男女差はない!-男性保育者からみた、子ども･社会･ジェンダー/綱川勇次さんに聞く-	綱川勇次･高橋淳子	女も男も/労働教育センター編集部 編, (78), 34-37
2003	性別職域分離とその変容-「男性保育者」の創成と転回-	中田奈月	博士学位論文：内容の要旨及び審査の結果の要旨, 20, 125-132
2004	男性保育者が直面するダブル･スタンダード	赤澤淳子	家庭科教育, 78 (8), 25-29
2020	保育者のジェンダーバランスに関する研究	松田こずえ	保育学研究, 58(2-3), 179-189
2020	男性保育者の子どもへのわいせつ行為の対策について-デンマークからの示唆-	上田星	国際幼児教育研究, 27 (0), 159-172
2020	男性保育者の「選択」と依拠する理論：進化人類学/ジェンダー	古谷 淳	保育文化研究, 123-132
2021	男性保育者の社会的な性に関わる諸要素についての考察	梅原健吾･小田進一	北海道文教大学論集, 147-154
2021	男性保育者の印象と女児の着替えに対する賛否-大学生を対象とした予備的研究-	渡邊寛	昭和女子大学生活心理研究所紀要, 33-42
2022	男性保育者のジェンダー平等意識に関する一考察-ノルウェーにおけるインタビュー調査から-	松田こずえ	お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 10, 13-24

（４）保育現場で抱える不安や悩みの意識共有による課題解決の模索

「保育現場で抱える不安や悩みの意識共有による課題解決の模索」に該当する論文は３編であった（表５）。男性保育者が保育現場で抱える不安や悩みを、男性保育者同士で構成するコミュニティの活動を通して、課題解決への手立てを模索する過程について検討されていた。中尾（2015）は、男性保育者が抱えている課題として、女性多数派である保育現場のなかで自身の気持ちや考えを表出させ難いこと、範となる保育経験豊富な男性保育者と関わる機会がないため自分の保育に自信が持てず、積極的な保育に取り組めないことなどを指摘した。勤務する園だけでは、男性保育者同士のコミュニティを形成することがほとんどないことが働きにくさにつながっていると推察される。また、保育者集団における少数派であるがゆえに男性保育者には地域や全国レベルのコミュニティ形成が必要とされており、小崎（2000）は、全国レベルのネットワークを作り、男性保育者として自己の存在をアピールし、自己研鑽や交流等を行える場所の確保を課題としている。

表 5　「保育現場で抱える不安や悩みの意識共有による課題解決の模索」に分類される論文一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
2000	男性保育者の現状とネットワーク	小崎恭弘	日本保育学会大会研究論文集, 632-633
2004	グラビア 男性保育者集合!-滋賀男性保育者連絡会結成大会開かれる-	豆塚猛	福祉のひろば /総合社会福祉研究所 編, 49 (414), 1-4
2015	本学卒業男性保育者の動向･意識の分析と「男性保育者の会」設立に向けた取り組みについて	中尾健一郎	研究紀要, 1-9

（５）海外における男性保育者の位置づけ

「海外における男性保育者の位置づけ」に該当する論文は、４編であった（表６）。諸外国における男性保育者にまつわる動向の把握、男性保育者の位置づけ、及び男性保育者導入の背景について検討し、日本における男性保育者増加のための示唆を得ることを目的としていた。調査対象は、イギリスやノルウェーといった欧州に焦点があてられる傾向があった。保育職に女性が偏在していることは国際的な現象である（OECD, 2018）が、欧州は 1986 年に欧州委員会保育ネットワークを立ち上げ、1996 年には、保育部門で働く男性の割合を 20%に高める目標を掲げており、早期から男性保育者を積極的に導入する姿勢を見せている。「保育の最良の条件は両性の保育者がいることであり、子どもはそれを求めている」「男性保育者は父親にとって必要」「男性保育者は父親に新しい父親モデルや新しい男性アイデンティティ・モデルを提供する」と男性保育者の必要性を共通認識とし、男性保育者の増加は男女平等に関するより広い政策の一環であること、ステレオタイプ化している旧いジェンダー観への挑戦であると主張が認められる（木下, 1999）。このように、男性保育者の必要性が我が国よりも早い段階で確認されており、男性保育者の増加政策モデルとしての意義があると考える。

埋橋（2002）によると、イギリスのシェフィールド・チルドレンズ・センターでは、1985 年に男性ワーカーを採用することについての方針が打ち出されており、1989 年には組織として雇用の比率を男性 50%、女性 50%にする方針を

確定したとして、保育職への積極的な男性の参入への姿勢が示されている。

山中（2019）は、男性保育者の積極的な導入政策をとり、男性保育者の割合増加に成功した国の一つであるノルウェーを研究対象とし、ノルウェーでは、政策当局が男性保育者の増加を推進するために、男性保育者団体の活動を重要視していることを明らかにしている。具体的な活動は、男性保育者団体が主体となって政策当局に提言を行うことや、前期中等学校において男性保育者団体の自主制作動画による保育職の紹介を実施すること等が挙げられており、男性保育者増に向けた取り組みが非常に活発であることが読み取れる。

男性保育者の割合を増加させるには、男性保育者団体としての活動を通じて、存在価値を示し、協同的に男性保育者の増加政策に取り組むことが喫緊の課題といえる。

表 6　「海外における男性保育者の位置づけ」に分類される論文一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
2002	男性保育者導入の目的-イギリスのある保育重点センターの実践に注目して-	埋橋玲子	保育の研究　保育研究所 編,(19),63-70
2007	保育における労働者としての男性欧州連合保育ネットワーク討議資料より	小崎恭弘	神戸常盤短期大学紀要,28,37-44
2008	保育における労働者としての男性欧州連合保育ネットワーク討議資料より(2)	小崎恭弘	神戸常盤短期大学紀要,29,85-101
2019	男性保育者の増加を促す方策についての一考察	山中拓真	国際幼児教育研究,26 (0),125-134

（6）男性保育者の職業観・ライフコース

「男性保育者の職業観・ライフコース」に該当する論文は、11 編であった（表7）。男性保育者のライフコースを明らかにすること及びキャリア形成における保育職の捉え方が検討されていた。

2000 年代初頭は、男性保育者は人数が少なく、社会的な認知が低かったためキャリアを予測しにくい存在であった。また、一般的な男性保育者のキャリアモデルは確立されておらず、個人のキャリアが大きく影響する時代であったと考えられる。中田（2000）は、このような社会状況から男性保育者を捉え、男性保育者は従来「女性の腰掛け」と考えられてきた「保育者」全体のキャリアに影響を与え、「保育職」全体のイメージや位置づけを大きく変える契機になる可能性があるとし、男性保育者のキャリア形成過程を明確にすることの必要性を強調している。また、複数の男性保育者のライフコースの分析から、男性保育者は一般的な成人男性のように周囲から職種に疑問を持たれずに従事することが難しく、周囲からあまり理解されず、僅かなステレオタイプに抵抗しながら業務継続を強いられることも明らかにした。さらに、職場の期待に応えるよう従事するだけでなく、伝統的なジェンダーステレオタイプを払拭するという社会的課題に挑戦しながら仕事を進めることが期待されていることを明らかにした。

男性保育者のライフコースに沿った保育意識の変容過程について青野（2009）は、男性保育者へのインタビュー調査から 4 段階の変容過程を明らかにした。保育職参入時の第一段階で男性保育者の多くは、保育職が子どもと関わることを目的とした専門職であると捉え、「子どもへの関心」があれば性別に関係なく従事できるという認識を持っていることを示した。第二段階では、女性保育者と共に保育を行う中で男性であるために自分にはできないこと（苦手なこと、

まかせてもらえないこと）に気づくことで「男性保育者としてのハンディ」に苦悩することになるという。そして、第三段階では、「男性保育者としてのハンディ」を克服することを目指し、「男性保育者の存在意義」を希求した意識へと変容し、第四段階では、保育経験の蓄積により男性保育者としての保育者イメージを構築し、男性であることに囚われず「一人の保育者」として「性別を超えた保育」を行うイメージを持つようになることを明らかにした。

しかしながら、男性保育者の意識の変容には保育職への長期的な従事が必要であり、早期離職が問題視されている現状においては、「一人の保育者」としての保育意識に到達する以前に保育者としてのライフコースをリタイアしてしまうことが危惧される。また、男性保育者の保育に対する意識については明らかになったものの、保育者としての自分自身をどのように捉えているのか、つまり、男性保育者の自己認識については十分に検討がなされているとは言えない。男性保育者が自らのアイデンティティや存在をどのように捉え、どのように位置づけた場合に長期的な保育職への従事が期待できるのか、今後の研究が必要であると考える。

青野(2009)の研究は、保育意識の変容過程を明らかにした点で非常に有意義な研究である。しかし、第二段階の「男性保育者としてのハンディ」は果たして“ハンディ”であるのか、検討が必要であると考える。確かに、指摘される通り、男性保育者はジェンダーに基づいた課題に直面するが、それらの課題は“ハンディ”ではなく、女性に任せられる業務と肯定的に受け止め、男性にできる保育を見つめなおすきっかけや女性保育者との相補的な関係と捉え、保育の発展等に繋がるのではなかろうか。過剰に否定的な表現であるため、男性保育者の多くがハンディと捉えがちであるのか、詳細に検討する必要がある。また、新庄（2019）は、中田の研究（中田，2000；中田，2004）が示したライフコースにおける保育者意識の変容は保育職が女性職としてのイメージが強いため、性別への多様性や包摂性を尊重する方向に進んでいる現在、その過程が変化しているのではないかと推察している。中田の研究(中田，2000；中田，2004)から約 20 年経過した今、改めて男性保育者のライフコースにおける保育者の意識過程を検討する必要があると言えよう。

富田・小野（2012）は、男性保育者としてのライフコースを歩むか否かの岐路に立つ経験をした養成校の卒業生に焦点をあて、質問紙調査からライフコース決断時における意識の変容を分析した。その結果、１つ目に、男性保育者を目指した学生たちのライフコースが多様であることが明らかとなり、対象者 41 名中 26 パターンのライフコースを確認している。２つ目に、富田・小野(2012)が 2007 年に実施した質問紙調査の結果から、対象となった養成校の卒業生のうち、保育職に進んだ者の離職率は 63％であるが、保育以外の福祉職に進んだ者の離職率である９％と比較すると、保育職の離職率が極めて高いことが明らかとなった。３つ目に、保育職参入後の継続・非継続、及び保育職への再参入・非参入の決断時における思いや葛藤として、(a) 受け入れ園側の雇用条件面の問題、(b) 保育職の特殊性の問題や、男性保育者特有の悩みの問題があること

を明らかにした。以上の結果から、男性保育者が保育者としてのライフコースを継続していくためには、保育現場における雇用体制の見直しや、養成校との協働も含めた支援体制づくりが必要であると指摘している。

男性保育者が保育職としてのライフコースを諦めるきっかけとして藤田（2018）は、男性保育者の離職意識に焦点をあて、保育職を一度離職し、その後保育職への再参入を果たした男性保育者を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、男性保育者は最終的な離職に対して『自己充実を図るための離職』と位置づけ『仕事に対してポジティブな離職』と認識していることを明らかにした。また、男性保育者は、日本に未だ根強く残っている性別役割分業意識により、家族を養う必要があるという意識やプライベートの時間を確保することの難しさを感じる一方で、保育の楽しさ等も感じ、両極端な意識が混在していることを明らかにしている。このような意識から、『家族としての自分』『自己充実を図る自分』『保育者としての自分』の三者においてそれぞれバランスをとるために離職を選択しており、男性保育者にとって保育職における離職は否定的な意味合いではなく、むしろ安定したライフコースを進めていくための決断であることを指摘している。

表 7　「男性保育者の職業観・ライフコース」に分類される論文一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
2000	男性保育者のライフコース-キャリアの実態を通して-	中田奈月	奈良女子大学社会学論集, 7, 67-78
2001	男性保育者のライスコース-コーホート分析-	中田奈月	奈良女子大学社会学論集, 8, 51-68
2004	男性保育者による「保育者」定義のシークエンス	中田奈月	家族社会学研究, 16 (1), 41-51
2009	男性保育職に対する意識-ジェンダーフリー保育の観点から-	青野篤子	福山大学人間文化学部紀要, 1-29
2011	男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか？(1)-保育専攻を卒業した男子学生への質問紙調査から-	富田昌平・小野文子	中国学園紀要, 97-108
2012	男性保育者を目指した学生たちは今どうしているのか？(2)-保育職への参入・継続をめぐる男性の思いや葛藤を中心に-	富田昌平・小野文子	中国学園紀要, 169-180
2018	男性保育者の離職について	藤田清澄	盛岡大学紀要, 95-101
2018	女性に偏る職業で男性は何をしているか：男性保育者の事例から	中田奈月	日本労働研究雑誌, 60 (10), 52-62
2019	男性保育者の入職に関する考察：そのライフストーリーに着目して	新庄洸	早稲田大学教育学会紀要, (21), 135-142
2020	男性保育者のキャリア形成におけるトークニズムの影響	香曽我部琢・藤田清澄・新屋貴大・中橋美穂	保育学研究, 58 (1), 81-91
2021	男性保育者におけるワーク・ライフ・バランス-ある男性保育者のワーク・ライフ・バランスの形成プロセスに着目して-	藤田清澄	盛岡大学紀要, 105-112

（７）男性保育者育成のための養成校の関わり

「男性保育者育成のための養成校の関わり」に該当する論文は、13 編であった（表８）。保育者養成校において、男子学生の受け入れは徐々に増えてきているものの、依然として稀有な存在である現状から、男性保育者養成における課題の明確化、及び今後の保育者養成カリキュラムについての検討を目的とする研究が見出された。

池田・高尾（2002）は、男子学生が保育職に就かない１つの要因として男子学生自身の「保育者になろう」という強い意志や、「男性保育者としていかにあるべきか」というアイデンティティの希薄さに着目し、男子学生のアイデンティティの変容過程について検討した。その結果、男性保育者による講演を受講することによって男子学生は男性保育者の必要性に関する意識を高め、「保育者になりたい」という強い意志が現れることを示している。また、保育者としての給与が一般の男性の平均給与より低値であることから経済的問題を意識し、

男性保育者の必要性や重要性を感じつつも保育者としての道を諦める者の存在を指摘している。養成校の果たすべき役割として、学生への教育のみならず、社会的な課題への働きかけにも尽力する必要があるとし、社会的地位の向上や経済面の保障が期待されていた。

安井（2013）は、男性保育者の退職理由となり得る専門的な保育スキルの育成に努め、養成段階で男性保育者が保育の専門職として自分を支えるプライドや実践力を身につける働きかけの必要性を示している。また、保育現場は様々な職種間で人間関係を築く環境にあるため、男女問わず一保育者として、基本的な社会の常識やマナーなどの基本を身につけさせる必要性を指摘している。保育現場では、男性保育者も一保育者として、専門家としての職責を果たすために周囲と協調するスキルが必要不可欠であり、人間性の育成が求められていることが見て取れた。

表 8　「男性保育者育成のための養成校の関わり」に分類される論文一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
2002	男性保育者を目指す学生の職業アイデンティティの変容過程について	池田孝博・高尾兼利	西九州大学・佐賀短期大学紀要/西九州大学, 佐賀短期大学[編], (33), 23-30
2003	保育士養成に関する一考察-新保育士養成教育課程及び男性保育者の視点から-	今泉利	所報/東海大学短期大学部生活科学研究所 [編], (17), 5-10
2005	男性保育者を目指す会「男塾」の取り組み	竹内進	大阪千代田短期大学紀要, 129-152
2005	男性保育士として仕事を続ける-在学生・現役男性保育士のワークショップ-	中田奈月・前迫ゆり	奈良佐保短期大学紀要, 第13号, 79-94
2007	保育現場に認識されている男性保育者の特徴	本多潤子・小林育子・桜井登世子・安村清美・鈴木力・成田眞・高嶋景子・中原篤徳	田園調布学園大学紀要, 第1号, 153-176
2008	幼児の母親は男性保育者にどのようなイメージを抱いているのか～育児の相談相手としての可能性を探る～	小林真・竹田誠	富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要　教育実践研究, No.2, p17-22
2010	保育者養成カリキュラムに関する一考察-養成カリキュラム改革および男性保育者養成に焦点をあてて-	田辺昌吾	四天王寺大学紀要, 237-248
2010	男女共同参画時代に相応しい保育者意識の養成に向けて(3)保育現場における男性保育者のイメージと特徴について	兼房律子・榊原志保・浅野敏彦	大阪成蹊短期大学研究紀要, 13-31
2010	男性保育者の歌声の実態に関する研究(2009年度研究助成成果報告)	鈴木慎一郎	研究年報, 15, 134-
2011	男性保育者の歌声の実態に関する研究	鈴木慎一郎	研究年報, 16, 69-
2013	保育者養成機関における男性保育者の養成について-卒業生にみる男性保育者の意識調査から-	安井恵子	滋賀短期大学研究紀要, (38), 55-66
2018	男性保育者のキャリアコースと心理的適応	西川晶子	信州豊南短期大学紀要, 38-54
2021	男性保育者の現状を課題についての一考察:施設庁及び男性保育者への質問紙調査から	長谷秀揮	四條畷学園短期大学紀要, 1-10

（8）その他

「その他」に該当する論文は、12 編であった（表９）。高嶋・安村(2007)や小泉(2023)は、男性保育者の現状や課題を検討することを目的としていた。また、新庄(2022)や喜多下(2023)は、男性保育者連絡会の動向を調査し、男性保育者に関する歴史的研究が進められてきたことを明らかにしている。また、青野(2008)は、保育現場のカリキュラムを通して、男性保育者のみならず、保育者全体の現状や課題を導き出すことを目的としていた。

以上のことから、「男性保育者」に関する研究は、多岐な視点から行われ、その存在意義を問う研究や、少数派である男性保育者自身がもつ課題意識を明らかにすると共にその対応策を検討する研究、さらには、男性保育者の生涯発達の過程を検討する研究が行われており、男性保育者が存続するための手がかりを得ようとする研究が比較的多いことが分かった。

表 9　「その他」に分類される論文一覧

発行年	タイトル	著者	雑誌名,ページ
2002	講演録 男性の保育者像について	池田孝博・高尾兼利	西九州大学・佐賀短期大学紀要/西九州大学,佐賀短期大学[編],(33),57-61
2007	男性保育者のユーモア行動に関する仮説の生成と検証	中澤潤・中道圭人・永井保	千葉大学教育学部研究紀要,第55巻,71-77頁
2007	「男性保育者」研究の動向:-男性保育者に求められる資質・役割に関する研究動向とその展望-	高嶋景子・安村清美	田園調布学園大学紀要,第1号,139-152
2008	園の隠れたカリキュラムと保育者の意識	青野篤子	福山大学人間文化学部紀要,8,19-34
2010	男性保育者を取り巻く近年の保育現場の動向と課題	菊地政隆	淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要,(17),235-245
2014	先輩園長からの伝言 保育の源流を探り未来(あす)を考える(第17回)男性保育者と女性保育者の支えでできた個性的保育	新澤誠治	保育通信,(716),28-30
2018	男性保育者に対する保育学生の意識に関する調査	松本希・宮宅健人・澤津まり子	就実論叢,229-235
2022	男性保育者の資格獲得運動史	新庄洸	幼児教育史研究,17 (0),1-16
2023	保育の発見(ほいくのはっけん) 悩み相談室〈著者編〉誤用のきらめき：若い男性保育者、熊谷君の成長物語(2)	赤西雅之	げ・ん・き,(195),30-39
2023	「男性保育者」を対象とした文献動向に関する研究-文献タイトルに用いられた語句の検討-	小泉篤	東洋大学大学院紀要,241-259
2023	保育の発見(ほいくのはっけん) 悩み相談室〈著者編〉女の子のオムツ替えは見ないで下さい：若い男性保育者、熊谷君の成長物語(3)	赤西雅之	げ・ん・き,(196),44-51
2023	1970年代の男性保育者の専門性認識とジェンダー：全国男性保育者連絡会における記録に着目して	喜多下悠貴	東京大学大学院教育学研究科紀要,62,651-658

Ⅳ　総合的考察

高嶋・安村（2007）の研究によって男性保育者に関する研究動向が検討されてから 17 年が経過した現在、男性保育者に関する研究は様々な視点から進められていることが明らかになった。男性保育者誕生以来、現在に至るまで、常に男性保育者は保育現場において期待を向けられ、必要な存在であると認識されていた。また、近年の男女平等意識の広まりから、保育現場だけでなく社会全体から性別役割意識を払拭した新たな職業モデルの構築が求められ、「男性保育者の存在意義」の一層の明確化と、男性保育者の割合の増加が望まれていると考える。

男性保育者には、誕生から現在まで「力仕事」や「ダイナミックな遊び」などが常に求められている。また、井上ら（2008）が示したような「体育指導の資格・運動や外遊びの技能」や「電気・木工・修理・修繕の技能」など女性が苦手と想定されていることの補助者や支援者としての役割が期待されている。また、近年の家族形態の変容から父親の育児参加の促進や父親のいない一人親家庭の子どもに対する父親的役割等、「父親としての役割意識」への期待も向けられるようになってきた。現代社会はジェンダーフリーへの動きが顕著に見られるものの、未だに、保育現場は意識的にも無意識的にも男性への性別役割を求めていると言える。このような現状から、保育現場において男性保育者は、「一人の保育者」としてよりも「男性という性別を活かした保育者」としての存在意義を求められ、男性保育者は男性であることを意識せざるを得ない状況であると捉えられる。

また、青野(2009)の研究により、男性保育者は性別に囚われた保育者意識から「一人の保育者」としての自己意識へと変化することが明らかになった一方で、このような意識の変容には長期的な保育職への従事が必要条件であることも明らかになった。男性保育者の早期離職が問題視されている現在、保育職を諦める前に「一人の保育者」としての自己意識へ到達することはかなり難しいことが分かった。男性保育者が「一人の保育者」として性別に囚われない自己意識を持てるようにするためには、養成期から活躍している男性保育者の講演を聴いたり、男性保育者同士が繋がりを持てるようなコミュニティを形成した

り等、男性保育者同士が交流できる場を保障することが重要であることが見出された。

他方、保育施設における理想的な保育者の男女比は「男性２割＋女性８割」や「男性３割＋女性７割」と男性保育者が占める割合が低く(戸田ら，2017)、男性保育者の存在への期待値は女性保育者ほど高くないことが判明している。しかしながら、我が国の男性保育者の割合は全保育者数の２割にも達していない現状にあるため、積極的に男性保育者の増加政策について検討する必要があると言えよう。

男性保育者は保育現場だけでなく、社会的に必要な存在として認識されていることも明らかにされている（戸田ら，2017)。しかし、男性保育者が保育職を選択し、継続従事するにはいくつかの困難があること、その困難が保育職参入時から離職時まで一貫して存在することも指摘されている（青野，2009)。専門性の高い職業でありながらも、収入が低いという経済的問題や専門職としての高度な保育スキルの習得等は性別に関わらず保育者として抱える課題である。さらに、男性保育者は女性の多い社会に適応することが求められる一方で、男性であることがハンディになる（青野，2009）ことも否めず、精神的負担が伴う可能性も否定できない。男性保育者が女性と同様に「一人の保育者」として従事するためには、社会全体での意識変革や制度の整備、男性保育者同士のコミュニティが形成される環境の構築が喫緊の課題であると考える。男性保育者の増加に成功した諸外国の実践知から、社会を挙げた意識変革や政策を打ち出すことの必要性が明白であると言えよう。

Ⅴ　今後の課題

男性保育者に対する保育現場、及び社会的な認識を明らかにする研究はなされているが、男性保育者自身からの視点に焦点を当てた研究は十分であるとは言えない。男性保育者の誕生から現在まで 50 年以上が経過し、男性が保育職へ参入する際の障壁は緩和され、養成校に在籍する男子学生や長期的に保育職を継続する男性保育者も徐々に増加している。しかしながら、依然として男性保育者の割合は極めて低く、早期離職も問題視されているのが現状である。保育者の不足が社会問題化している現在において改めて男性保育者の存在意義を問い、男性保育者自身の視点から男性保育者の増加に向けた取り組みに必要な要素を見出すための実態調査が急務であると考える。

男性保育者が保育職にやりがいを感じ、長期的なキャリアを築くためには、安定的に「一人の保育者」としてのアイデンティティを確立するための一定の時間が必要である。しかし、これまで男性保育者の保育意識の変容過程には焦点が当てられたが、男性保育者自身の自己意識の変容過程は十分明らかにされているとは言えない。男性保育者のライフコースを詳細に分析するとともに、男性保育者が自らを「一人の保育者」と捉える契機について、保育職への参入や継続との関連から明らかにすることは男性保育者の増加と離職防止に有用な知見が得られると考える。

引用文献

赤澤淳子（2004）男性保育者が直面するダブル・スタンダード．家庭科教育，78（８），25-29.

青野篤子（2008）園の隠れたカリキュラムと保育者の意識．福山大学人間文化学部紀要，８，19-34.

青野篤子（2009）男性保育職に対する意識―ジェンダーフリー保育の観点から―．福山大学人間文化学部紀要，１-29.

藤田清澄（2018）男性保育者の離職について．盛岡大学紀要，35，95-101.

古橋紗人子・早川滋人・安井恵子（2008）男性保育者の有効性について―父親のマンパワー・男性保育者の意識調査から―．滋賀女子短期大学研究紀要，(33)，59-71.

古谷淳（2020）父親の子育て参加と男性保育者の影響/役割：欧州、北米、オセアニア８カ国の研究から．教育学研究明星大学通信制大学院研究紀要，19，73-86.

池田孝博・高尾兼利（2002）男性保育者を目指す学生の職業アイデンティティの変容過程について．西九州大学・佐賀短期大学紀要，(33)，23-30.

井上清子・石川洋子（2008）男性保育者に求められる役割と課題．生活科学研究，30，207-214.

出雲美枝子・ 佐藤利一（2010）性差に関する意識調査による女性・男性保育者の役割考察．大阪芸術大学短期大学部紀要，(34)，75-90.

木下比呂美（1999）EU における保育・家族政策と男性の保育参加．海外社会保障研究，(126)，94-104.

喜多下悠貴（2023）1970 年代の男性保育者の専門性認識とジェンダー：全国男性保育者連絡会における記録に着目して．東京大学大学院教育学研究科紀要，62，651-658.

小泉篤（2023）「男性保育者」を対象とした文献動向に関する研究―文献タイトルに用いられた語句の検討―．東洋大学大学院紀要，59，241-259.

小崎恭弘（2000）男性保育者の現状とネットワーク．日本保育学会大会研究論文集，632-633.

小崎恭弘（2001）男性保育者の社会的役割―その変遷と新たなる役割―．日本保育学会大会研究論文集，68-69.

松田こずえ（2020）保育者のジェンダーバランスに関する研究．保育学研究，58(２－３)，179-189.

松本希・宮宅賢人・澤津まり子（2015）男性保育者に対する保護者の意識に関する研究．就実論叢，第 44 号，303-309.

中尾健一郎（2015）本学卒業男性保育者の動向・意識の分析と「男性保育者の会」設立に向けた取り組みについて．研究紀要，27，１－９．

中田奈月（2000）男性保育者のライフコース-キャリアの実態を通して-．奈良女子大学社会学論集，７，67-78.

中田奈月（2004）男性保育者による「保育者」定義のシークエンス．家族社会学研究，16（１），41-51.
OECD（2018）Education at a glance 2018. OECD indicators. https://www.oecd.emb-japan.go.jp/files/000398872.pdf（情報取得 2023/10/11）
新庄洸（2019）男性保育者の入職に関する考察 ： そのライフストーリーに着目して．早稲田大学教育学会紀要，(21)，135-142.
新庄洸（2022）男性保育者の資格獲得運動史．幼児教育史研究，17（０），１-16.
総務省（2023）令和２年国勢調査結果．https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0004003081（情報取得 2023/12/01）
田辺昌吾（2017）家庭と連携した保育を展開するための一方策―保育現場における父親支援に焦点をあてて―．エデュケア，37，19-26.
高嶋景子・安村清美（2007）「男性保育者」研究の動向：―男性保育者に求められる資質・役割に関する研究動向とその展望―．田園調布学園大学紀要，第１号，139-152.
竹沢昌子（1999）男性保育者へのまなざし―保育現場における男性保育者に関する意識調査より―．沖縄キリスト教短期大学紀要，299-310.
戸田大樹・松本佳代子・氏家博子・荒木由紀子・飯塚汐里・高橋健司（2017）男性保育者の必要性と理想的な保育者の男女比に関する意識調査―保育者志望学生と女性保育者を中心として―．創価大学教育論集，第 69 号，３-17.
富田昌平・小野文子（2012）男性保育者を目指した学生たちは今どうしているのか？（２）―保育職への参入・継続をめぐる男性の思いや葛藤を中心に―．中国学園紀要，11，169-180.
埋橋玲子（2002）男性保育者導入の目的―イギリスのある保育重点センターの実践に注目して―．保育の研究，(19)，63-70.
渡邊寛（2021）男性保育者の印象と女児の着替えに対する賛否-大学生を対象とした予備的研究-．昭和女子大学生活心理研究所紀要，23，33-42.
山中拓真（2019）男性保育者の増加を促す方策についての一考察．国際幼児教育研究，26，125-134.
安井恵子（2013）保育者養成機関における男性保育者の養成について―卒業生にみる男性保育者の意識調査から―．滋賀短期大学研究紀要，(38)，55-66.

Studies on Male Child Caregivers, Past Trends and Future Perspectives - Literature Review

KURIHARA Kyogo*1 HASUI Kazuya*2 KATAYAMA Mika*3

The purpose of this review was to identify research trends from previous studies on male child caregivers and to identify remaining issues for the future. Eighty-

four reports were selected from the CiNii Research, which first searched the target literature using ″male child caregiver″ as a keyword. These articles have been grouped into eight categories based on their content. An examination of these categorized articles reveals that there is limited research from the perspective of the men who provide care, while the situation in childcare settings and the public's perceptions of male childcare providers are relatively clear. As future issues, it is necessary to re-examine the social perceptions surrounding male childcare workers, and to clarify the self-perceptions and challenges these workers face in finding fulfillment in the childcare profession.

Key words: male child caregiver, research trends, literature review, future perspectives

*1 Okayama University Graduate School of Education Graduate Student
*2 Kawasaki University of Medical Welfare
*3 Faculty of Education, Okayama University